
契約友達

あやヾ(´^ω^)/

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

契約友達

【Nコード】

N4084B

【作者名】

あやゝ（＾ω＾）ノ

【あらすじ】

本当の友達って…何？本当の友達は…こんなことしないよね？裏切られて、裏切られて…。友達にも、恋人にも裏切られてばかりの智華は、中学を卒業できるのか？涙有り（？）の友情を描いた小説です。

***プロローグ* (前書き)**

本当の友情って…？

この小説を読んで何か感じ取って欲しいです。

この話は、実際に私（作者）の周りで起こった話でもあります。（一部フィクション）
それと、あらすじに『涙有り』と書いてありますが、個人差がありますので・・・。

プロローグ

「じゃ…、ここにサインして。」

私…何してんの…？

静かな教室に、響き渡るペンの音。

「片瀬 智華ッ…。じゃ、確かにっ！はい、これっ、例のものね！」

……自分のやっている事に、腹が立ってしょうがなかった。

vol. 1＊一目惚れ

私は片瀬智華。

ごく普通の中学生。

3日前、クラス替えをした。

中学生になって2年目、『先輩』になった。

テストは、いつも30位以内には入ったし、運動神経も、良くはないが悪くはない。

もちろん、それなりの恋愛もした。

友達関係も安定している。∴いや、安定していた。

∴3日前までは―――。

――1ヶ月前

「とーもかつ！帰ろ♪」

同じクラスの藍子。

小学校の頃から仲が良くて、家も近くて、毎日一緒に帰っていた。

「ごめーん！今日補習だってー、抜き打ちでテストあってさあ。2
0点だったあ。」

「ええ！いつも30位入ってる智華が！？大丈夫ー？待ってよっか
？」

藍子は、笑って私のことを見る。

「平気だよ。」

だから私も、笑って返す。

「…そう？じゃあ…わかったよ。補習頑張れ！」

藍子は大きく手を振りながら門に向かっていった。

「またねー！」

「うん。またね。」

今日のテスト、私が集中できなかったのにはわけがある。

実は、クラスが一緒になって、私の前の席の二ノ宮聡くん…、

一目惚れしてしまった。

聡くんは、金と茶が混ざった髪に、
胸元のネックレスが魅力的だった。

十字架のネックレスで、中心には小さなダイヤモンドが埋まっている。

テストなんかよりも…聡くんを見ていたくて。

問題に苦戦して、頭を掻いていたところにも惹かれた。

おかげで、テスト時間は終わってしまい、20点という結果になった。

今日が、私にとって初めての補習だった。

vol. 2＊補習授業

藍子と話していたせいか、教室にはたくさんの補習生が来ていた。

私は、空いている席がないか見回す。

それと同時に…聡くんの姿も探してしまう。

「智華 あっ！」

窓側の前の方から聞いたことのある声がする。

「りーちゃん!？」

りーちゃん。原川梨奈子。

隣のクラスで、スポーツならなんでもできる女の子だ。

小学校5、6年の時に同じクラスだった。

別に仲良くなかったし、好きでも嫌いでもなかったけど、

いつも一緒に行動する5人グループの一人だった。

「なんで智華が補習なんて受けてんの？」

「それはねー…色々あって。りーちゃんこそ、珍しいんじゃないの？」

「あたしはねー、毎回こうだから！懲りないんだよね。今回のテストは20点！」

げ、私と一緒にじゃん…。

「あたしの隣空いてるからさ、座んない？」

りーちゃんは空いている席を指差した。

『1組、山口』

『西野』

『田口』

出席を取り始めたようだ。

私はノートと参考書を机の上に広げ、窓の向こう側の雲に目を向ける。

『次、4組な。片瀬』

「あ、はいっ！」

次の瞬間、先生の思いがけない発言に胸を躍らせた。

『上野』

…上野?…上野…聡?

『んー? 上野いないのか? 補習は強制なのに! まったく。』

ひげを闇雲に触りながらピリピリしている先生を見ていたら、

後ろの方から、…走って来たのだろう、

息を切らせた、…聡くんの声がする。

「ハアッ…すみません！…遅れですか…？」

胸元のネックレスはまだ飛び跳ねている。

「遅いぞ！…だがまだ出席を取っている最中だ。許してやろう。」

聡くんは、ペコッとお辞儀をし、一番入り口に近かった席に腰を下ろした。

「よってこの問題は、 $a + b - 2a + 4b$ の…」

聞いてられない説明。

本当は、聡くんのことを見たいんだ。

けど、後ろを向いたら、好き、ってことがばれだよね。

周りからも、聡くんからも…。

みんな、以外とまともに補習を受けていて、聞いているのは私だけみたい。

「では…そろそろ終わりにしましょう。」

短かった、初めての補習は終わった。

終わったと同時に、私はりーちゃんに声をかけた。

「りーちゃん、今日一緒に帰れる？」

「あ、いいよお、ちょうど私も一人だったから！」

私はカバンを持ち上げた。

「あ、でもちょっと待ってて！」

カバンを持ち上げたりーちゃんは、入り口の方へ走っていった。

……ううん、違う。聡くんの方に走っていったんだ。

「上野お！明日なんだけどさ、上野んちのおばさんが車出してくれるんだよね？」

「ん、ああ。松田と岸边もいるけどな。」

…りーちゃんと聡くん、まさか付き合ってたたり、するのかな。

私は仲良く会話している二人のことを、遠い目で見つめていた。

「俺今日近所のガキにサッカー教える約束してんだ。
だからさ、急いでんの。後でメールして？」

『後でメール』…。メアド交換してるんだ。

「じゃね、上野。」

「ああ梨奈子。」

『梨奈子』…。名前で呼んでる…。

そんなに親密な関係なのかな。

…帰り…りーちゃんに聞いてみよう。

vol. 3＊帰り道の熱

———帰り道

私とりーちゃんは、話すことなん特になくて、おたがい携帯電話をいじっていた。

私は、そんな陰悪な空気の中、話を持ちかけた。

「あのね、りーちゃん。あたし、聞きたいことあるんだけど。」

「ん…？」

りーちゃんは携帯電話から目を離さなかった。

『聡くんと付き合ってるの？』なんて、恥ずかしくて、とてもじゃないけど聞けない。

けど…聞かなきゃ。

「さ、さ、ささっ、さっきさ、りーちゃん、さ…聡くんと話してたよねッ！」

りーちゃんは、携帯をピコピコいじっていた手を止めた。

「…は？」

りーちゃんは、何年も前からこうだ。

都合の良い時には仲良くして、自分の都合が悪くなったら冷たい態度をとる。

だから、いつになっても好きになれない。

「聡？は？意味わかんない。何言ってるの？なんで聡なの？」

「…いや…、りーちゃん、聡くんと仲よさそうだったからッ！
どんな関係なのかな？って思ったの。」

わかりやすい言い訳。

私は、自分の頬がどんどん赤くなっていくのが触らなくてもわかった。

「…はーん♪わかった！聡のこと好きなんでしょ？」

お約束の展開。

「…ちがつ、そ、そんなわけないじゃん！」

私は手を振って照れ隠しをする。

「安心しなよ。そんな関係じゃないって。

ほら、部活の！うちサッカー部じゃん？

明日北中と練習試合あるから、車とか出してもらおう都合でアドと交換してんの。

親たち仲 いいし。」

そうだったんだ…。

なんだ、付き合ってるんじゃないんだね。

よかった。

「聡のメアド教えよっか？」

りーちゃんが、私のほうに携帯の待受画面を向ける。

「いいの？」

「うん♪そのかわりい、クレープおごってね！」

りーちゃんが、にっこりと私に向かって微笑んだ。

この笑顔は、どうも嫌いじゃない。

「うん、ありがとう！」

手早く聡くんのメアドを受け取り、走って5分ほどのクレープショップへ向かった。

vol. 4 *久しぶりの着信音

『こんにちは。片瀬智華です。梨奈子ちゃんにアド聞きました。ごめんなさいっ☆明日サッカーの練習試合あるんですか？頑張ってください！！それと、よかったら応援に行きたいんで、どこでやるか教えてください。北中ですよね？では♪』

帰ってきてすぐ、こんな内容で初メールを送った。

…返事はすぐに来た。

『メールありがとう。応援来てくれるんだ。場所は北中の第3グラウンド。俺も前から片瀬と話してみたいと思ってたから、

丁度良かったよ。じゃあ。』

読み終わったとき、私は携帯電話を抱きしめた。

それと同時に、ベッドに寝そべり返って、今日一日のことを振り返

った。

…初めての補習。微妙だったなあ…。

いつも成績は平均以上だったはずなのに？

…聡くんのせいだよ？

『ありがとうございます^^明日行きますね！じゃあ、また明日！』

私は数分で文を打ち、いちご柄の枕を抱きしめた。

…ちよつと寝よつかな…。

目をつぶった、その瞬間だった。

♪ピロリン

携帯の着信音。

…聡くんかな？

私はワクワクしながら受信ボックスを開けた。

〔優亜〕

ゆうあ…？珍しいなあ。メールなんて。

優亜は小学校時代の同じグループの一員だった。

何よりも自分を優先する子で、自分の思い通りになるまで事を進める…

いわゆる『自己中』だった。

けれど、私と優亜は2人組みになる時などはいつも一緒に、

優亜の自己中に耐えていた。

中学になってクラスが別れて、それ以来はあまり話さなくなった。

『やっぱり★優亜だによ！元気だった？突然だけど、明日一緒に北
中行けませんか？』

彼氏がサッカーの練習試合らしくてっ…！返事ください！』

優亜、いつの間にか彼氏できてたんだ。

一人で北中まで行くの心細かったし、丁度いいや。

『いいよ！じゃ、〇〇駅に9..00でいいかな？あたしも見に行こうと思ってたから！』

じゃ、今からはちみつレモン作ろつと♪またね！』

…送信つと。

さてと、はちみつレモンでも作って、早く寝ようかな。

私は台所へ向かった。

…この時は…まだ、これっぽっちも思っていなかった。

親友だった優亜と…

あんな事するなんて。

vol. 5＊試合観戦＊part1

8..40。

携帯の画面にはそう出ている。

ちょっと…早すぎたかな？

私は駅の小汚いベンチに腰を下ろすと、携帯の着信音になった。

〔優亜〕

優亜からのメールだ。

私は軽い気持ちで受信ボックスを開く。

『ごめん←←寝坊したから先に行ってくれない？まじごめんっ！』

私は寝坊したんだから優亜は放っておこうと思い、ベンチを立ち切符売り場まで走った。

私は8・47の快速電車に乗って、聡くんのいる北中に向かった。

快速で一駅。さらにバスで20分走ると、聡くんのいる北中第3グラウンドに到着だ。

私が北中に来るのは初めてで、自分の学校以外で聡くんに会うのも初めて。

初めてなのに一人だけで来ちゃって、心細かったりもする。

はやく優亜こないかなあ……。

いつの間にかバスは最寄りのバス停に到着。

走ってグラウンドまで行くと、そこには聡くんや、部のみんながい

た。

—ピッピイイッツ……—

試合の開始を知らせる笛だ。

私は遠くから試合を見守っていた。

頑張れ。聡くん。

今年度の学年キャプテンと、
まだ早いのだが学年時期キャプテン候補を決める試合のようで、
練習試合とはいえみんな真剣だ。

私は北中のサッカー部を応援している女の子たちのなかに紛れていた。

みんな「隆一」「隆一」と同じ名前を連呼している。
北中のキャプテンかなんかかな？

その時、試合が始まった時と同じ笛の音になった。

どうやら。北中が一点入れたようだ。

入れたのは…真っ黒なスポーツ刈りの、背が高いのが印象的な男子だ。

女の子たちは「隆一かっこいいー！」とキャーキャー叫んでいる。

おそらく、いや、あの人が、隆一、だろう。

私は聡くんを見ながらも、少し隆一くんも目で追っていた。

その時、ハアハアしながら誰かが私の肩を叩いた。

「ハアッ、智華ごめーん。ハアッ。」

優曲だ。

vol. 5＊試合観戦＊part1＊（後書き）

変なところで終わらせてごめんなさい！

vol. 6＊試合観戦＊part2＊

優亜は私の服の裾を掴んでハアハアしている。

「バス出てなくてえ…走ってきたし…。」

…走ってきた？

バスに乗っても20分近くかかるのに、だからこんなに遅かったんだ。

「…あ、いたっ！見て智華っ！あれあれ、あたしの彼！」

優亜は休憩中の男の子たちを指さした。

「あ、よくわかんないか。待って、レモン！あげてくる！」

優亜は女の子たちの向こう側へ行って、手を口にあて、大きな声で言った。

「隆—いい！そっち行ってもいい—？」

：優亜の彼氏は隆一だったんだ。

他の女の子たちの痛い視線を浴びながらも、
優亜は走って男の子たちの方へ行った。

私の隣では女の子たちからの優亜への悪口が聞こえる。

「みなさーん♪隆一の彼女の優亜でーす♪みなさんレモンをどーぞ
！」

この一言に、隆一狙いの女子みんなが凍りついた。

他中に彼女がいたなんて：おそらくそんな気持ちだったであろう。

優亜は持っていたタッパーを開け、北中の男子に配っていった。

優亜のレモンは大好評のようで、タッパーはたちまち空になった。

隆一狙いの女の子はみんなで帰っちゃったし、
優亜は男子に混じっているし、私は一人ぼっちだった。

少し後ろに下がって、芝生に三角座りをすると、
後ろからだれかが私の肩を叩いた。

「わっ！」

私の肩を叩いたのは、なんと聡くんだった。

「やっほ♪来てくれたんだ。」

聡くんは、私の隣に三角すわりをした。

「あのさあ、北中の奴ら、岡村のレモン食ってるみたいだけどさあ
…、

片瀬はなんかねえの？…差し入れ…。」

聡くんの頬がどんどん赤くなってゆく。

私の頬も、それにつられて赤くなってゆく。

私はニコニコしながら言った。

「…もちろんあるよっ！私のは…聡くんだけのために…」

聡くんの頬が赤くなってゆくのは止まらない。

聡くんの耳も赤く染まってゆく。

「…おうっ。」

私は持ってきたトートバッグから水色のタッパーを出した。

私は無言でふたを開け、無言で聡くんに差し出した。

聡くんはレモンを一枚つまんで、ゆっくり口に入れた。

「…うまい。」

私のドキドキは最高潮で、今までにないくらいの高鳴る胸の鼓動に包まれた。

私は聡くんの一言に、笑顔という形で返事をした。

その時、私はどこからか苦しい視線を感じていた。

vol. 7＊友達契約

帰りのバスは憂鬱だった。

優亜はひたすら隆一とメールし、私は一人で窓の外を眺めていた。

そんな中、2人に会話は生まれるわけないと思った。が、生まれた。

「あのさあ、智華、聡くん狙ってんでしょ？」

私は隠し事をするのがどうも苦手みたいで、すぐに顔に出てしまう。

「違っ…違うつて！そんなんじゃないよ。」

「じゃあ、なんでイチヤイチヤしてたの？あたし見たんだからね。智華のレモンを聡くんが食べてるところ。」

…言い返せない。

それどころか、私の頬は言うことを聞かなくて、どんどん赤く染ま
ってゆく。

「なーんだ、行ってくればよかったのに。隆一と聡くん、カナリ
仲良いんだよ。」

「え！それ本当？」

私は思わず大きな声を出してしまった。

周りの人が、みんな私を見る。

「…すみません。」

私は思わず小さくなった。

でも、やっぱり頬は赤くなるばかり。

元に戻る気配はこれっぽちもない。

自分でも、興奮ぎみなのがよくわかる。

一人でため息をつくとき、隣で優亜が小声で言う。

「聡くん。近づきたいんでしょ？」

頬が熱い。私は小さく頷いた。

「だったらさあ、特別に協力してあげる♪
たぶん聡くんも智華の事意識し始めてるし、隆一に協力してもらえば完璧だよー！」

「…う、うん…」

優亜の考えには無理があるような気がした。

「絶対に、絶対何があっても智華たちをくっつけてあげる。」

優亜は携帯をバッグの中へしまった。

「…本当？」

「うん。本当。約束するよ。けどね、その代わりに…」

優亜は窓の外の景色を見ながら私の事を見ずに言った。

「その代わりにね…あたしと…ちょっとした契約してほしいの。」

そう言うのと、優亜はパッとこっちを向いた。

「…何それ。契約？」

私の頬が、やっと冷めかけた時だった

「…私と…これからずっと…一生…ううん、永遠に仲良くして。」

私は、契約って、もっと怖いものだったりするのかな？
と思っていたが、予想は外れ、意外にも可愛らしいものだった。

すると、私の熱が移ったかのように、優亜の頬が赤くなりだす。

私だったら、『永遠に仲良くして』なんてとてもじゃないけど言えない。

相手は私の事を、表では仲良くしているけど裏では嫌っているかもしれない。

そう考えると、言った後の反応が怖くて怖くて、絶対に言えない。そんなセリフを一瞬のうちに口にした優亜は、やはり性格に『自己中』が入っていることを感じさせられる。

『永遠に仲良くして』。

仮に、それを自分が言ったとして、相手に『ヤダ』なんて言われたら、

悲しくて当分開き直れないかもしれない。

そう考えると、ここで「ヤダ」と言ったら、間違えなく優亜との関係はなくなるだろう。

けど、優亜の事はそんなに好きじゃないし、永遠に仲良くなんて無理だと思う。

ここは、断るべきだろう。

けど、聡くんと仲良くしたいし…。

私が小心者じゃなければ、こんなに悩まなくてすんだのに…。

私が一人で考えている間、2人には空白の時間が生まれていた。

「…智華、ダメ？」

優亜が空白の時間を突き破った。

「…契約して、どうすんの？」

なぜだかわからないが、優亜の目は涙ぐんでいた。

「どうもしないよ。智華とずっと仲良くする自信なかったから…。」

私までもらい泣きしそうだ。

「……いよ。」

「…へ?」

「いいよっ! わかった。契約しよ!」

優亜の赤い頬には涙がつたつた。

「…ありがとう。じゃあ…明日放課後、あたしの教室来て。」

何をするんだろう…。

その時、バスは止まり、私と優亜は真っ先に降りた。

優亜がこの時演技をしていたこと

私と友達契約をした優亜の本当の目的

私がこの二つに気付いたのは、中学を卒業する前日だったー。

vol. 8＊仮病未遂

昨日、家に帰ってきたのは7..00過ぎで、晩ご飯も食べずに寝てしまった。

帰ってきたらもうヘトヘトで、だけど頭の中には優亜がいて…。

学校に行くのが、嫌だった。

優亜に会いたくないから?…それとも…。

朝になった。

窓からは眩しい光が入ってくる。

今日は今月に入ってから一番の快晴という予報で、

それは見事に的中し、4月とは思えないくらい日が照っている。

今の私には太陽の下になんて出る気はないし、学校に行く気もない。

…仮病…使っちゃおっかな。

一日だけなら、きっと神様も許してくれる。

私はそう甘く考えて、布団の中へ潜り込んだ。

―布団の中に入って約15分。

布団を軽く持ち上げて、壁にかかっている蓐がいっぱい描かれた時計を見ると、

針は7…20をさしている。登校時刻に間に合わせるには、この家を7…40分に出なければならない。

もうすぐお母さんが起こしに来るだろう。

…すると、ドア越しに階段を昇る足音が聞こえた。

その音は少しずつ駆け足になって…そして、私の部屋にたどり着く。

ドアをガチャッと開ける音が聞こえたので、私はとっさに布団に潜り込んだ。

「智！起きて！学校に遅刻するじゃないの！」

ほら。

やっぱりお母さんだ。私が自分で起きられない時は、絶対来てくれるよね。

そんなお母さんは、必死に智、智と連呼しながら私を布団ごと揺さぶる。

「ん…？あ、お母さん…どしたの…んんーっ。」

私は何もなかったように今起きたフリをして、かったるそうに目を細める。

「何言ってるの！学校よ！登校時刻！」

私は壁の時計を見た。もちろんわざと。

「ああ…ねえ、なんか頭痛いみたい…。」

私はおでこに手をやった。

「何言ってるの？それより早く支度しなさい！」

「ふぁーい。けど痛いよ…。」

私はお母さんの目を見つめる。

そしてお母さんは、私の事をにらむ。

「あーもうっ！うるさい！うるさい！何？熱でもあるっていうの！？」

お母さんは着ているエプロンの裾で、雑巾を絞るような仕草をしながら言った。

私も頭を抱えながら言った。

「熱はあるかわかんない…。けど…」

「けど何!?!」

お母さんは朝から怒鳴りっぱなしだ。

「ああもうっ! 絶対仮病でしょ! わかるんだからね!
そんなこと言うなら自分で測って見なさいよ! 体温計のある場所わ
わかるでしょ!?!」

これこれ♪この言葉を待ってたんだ。

「うん。リビングの電話の乗ってる戸棚の…えっと、2段目?
そこまで行けな…い。代わりにお母さん取ってきてー。」

お母さんは大きなため息をつく。

「もう40分じゃないの。もう…、しょうがない子ね。

その代わり熱がなかったら、遅刻してでも学校に行かせますよ!」

「…ふぁーい。」

お母さんはスタスタと音をたててリビングのある1階へと階段で降りていった。

—2, 3分後。

「ほら、自分で測りなさい。

お母さんはお父さんの支度もしなくちゃいけないから、下へ行ってるよ。」

「はあい。」

お母さんがドアを閉めたのを確認したら、私は手で体温計の先を擦り始めた。

こうすれば、摩擦で温度が上がると、前に先輩から聞いた覚えがある。

成功するかわからないけど…。

約30秒擦り、体温計の小さな画面を見たら40℃にまで上がっていた。

40℃は…、さすがに嘘くさいし、だめだなあ。

しかも、次の瞬間、なぜだか『エラー』の表示も出てしまった。

私は一旦、自分の脇に体温計をさし、本当の体温を測ることにした。

『ピピッ
ピピッ
ピッ』

計測完了を知らせる音になった。

画面には…37.8℃。

何これ、微熱じゃん？っていうか普通に熱あんじゃん。

自分では頭痛いとか、お腹痛いとかそういう意識は無いのに…。

休みたいって強く思っていたら、本当に熱があつた。

こんなに虫のいい話あるのかな…？

私は熱をくれた神様に感謝し、そつとため息をつく。

良かった。今日は優亜に会わなくて済む。

友達を契約しなくて済む。

私はそう考えていた。

vol. 9＊先輩の過去〜part1〜

熱はあっても、私はとても元気で、本当に仮病のように思えた。

お母さんは昼間パートに出るので、私は家の中で一人だった。

暇だった私はパソコンを立ち上げ、同じ部活だったの先輩のブログを見てみる。

…言い遅れたが、私は部活をやっていた。バレー部である。

吹奏楽や美術など、おとなしくするものは私には向いてないし、ソフトボールやテニスなど、基本、外で活動する部も嫌だ。

サッカー部や野球部は論外で、残されたのは水泳、演劇、バスケット、バレー、そして帰宅部だ。

水泳は全く無理。

数メートルも泳げない。

未だに潜る事で精一杯。

演劇とバレエは男女混合だから嫌だ。

本当は、帰宅部が良かったのだが、私には「帰宅部は虐められる」という印象があり、

また、兄や姉がいる同級生の子も帰宅部は進めなかった。

そしたら、残りはバレエ部だった。虐められない為に入った部活も、今では楽しくてしょうがなくて、ほぼ毎日休まずにやっていた。

その中でも、晴れて今年から高校生の井口真琴先輩は、後輩に優しくて、先輩とも仲良くて、友達がいっぱいいて、私から見ても、

他の友達から見ても憧れそのものだった。

これは私が一方的に思う事だがたぶん、真琴先輩は部で一番の努力家だっただろう。

真琴先輩はちょっとぽっちゃり系で、運動も得意な方ではなかった。

だがその分他のメンバーより頑張っているから、いつもレギュラーに選ばれたんだ。

真琴先輩のブログはほぼ毎日更新されていて、私はたまに気が付いた時にブログを見る。

『ついに彼氏が出来ましたあ♪』

見出しにはそう書かれている。

真琴先輩、彼氏できたんだ。

おめでとう。

私は先輩の、こんな過去を知っていた―。

――去年の6月。私が部活にやっと慣れて来た頃だ。

当時3年生だった真琴先輩は、隣のクラスに彼氏がいた。

真琴先輩の彼氏は生徒会長だった梅沢くん。

梅沢くんは性格も良く、顔もよく、運動もできれば頭もいいという、完璧な男だった。

が、後から気付いた事なのだが、最低な女ったらしだった。

未だになぜ私だったのか疑問なのだが、
真琴先輩は私に『彼の誕生日プレゼントを一緒に買いに来て欲しい』
と言った。

私は、生まれて初めての先輩からの誘いだったので、嬉しくて嬉しくてもちろんOKした。

次の日、電車で揺られて30分。

大きなデパートに行って、私と真琴先輩はプレゼントを選んだ。

私はほぼ付き添いで、いる意味も無くて、ほとんど会話もなかった。

話したことといえば、

何でバレーに来たの？部活楽しい？とか、バレー部のことくらいだった。

相手は先輩だったので、自分から話を切り出すことも出来なかった。

そして買ったのは香水だった。

まだ中学生になって間もなかった私は、真琴先輩のことを大人だなあ、と感心した。

vol. 10＊先輩の過去（part2）（前書き）

ごめんなさい！更新遅くなりました！

遅くなった分もしっかり頑張りますので、よろしくお願いします！

vol. 10＊先輩の過去（part2）

真琴先輩は、いつも香水をつけていた。

部活の時は汗に隠されてしまう匂いも、

制服に着替えたらいつものいい香りの先輩に戻った。

真琴先輩が、彼氏にかったのは「パーフェクトラブ」。

私も、せっかくここまで来て何もかわずに帰るのは嫌だからと、一番安かった、アナスイの「シークレットウィッシュ」を買った。

私と真琴先輩は買った香水の入った小さな紙袋を手を持ち、帰りの切符を買いに長い列に並んだ。

切符売り場はいつも混雑。

背の小さな私と先輩は、
人の中に埋もれてしまいそうだった。

・・・やっこの思いで切符を買ったが、
電車はちょうど2分前に発車していて、
次に電車が来るのは約30分後だった。

私と先輩は改札口上にある電光掲示板を見て、
そして2人で顔を合わせた。

「時間あるし：お茶でもしよつか！」

先輩の誘いに、私は首を大きく縦に振った。

そして私たちはすぐそこにあるお洒落なカフェへ入った。

「いらっしやいませー！」

カフェの中はレトロな空間で、
店員の身に着けている茶色のエプロンが妙に馴染んでいい感じ。

あんまり大きな所じゃないようだが、大変気に入った。

「いらっしゃいませ！2名様ですね？ご案内いたします。」

二十歳過ぎくらいの髪の毛が真っ黒でサラサラな女の子は、
ハキハキとした声で私と先輩をあいていたテーブルカウンターまで
案内した。

「ご注文がお決まりになったらお呼びください。」

そう言い残して足早に去っていった。

私と先輩はメニューに目を向けた。

「智華ちゃん何にするー？このショートおいしそうじゃん？」

先輩は大きく写真の載っている苺のショートケーキを指さした。

「じゃあ…あたしそれにしようかなっ！」

私も写真を指さした。

「じゃあ、あたしもっ！」

私たちは顔を合わせてクスツと笑った。

「すみませーん！オーダー頼めますかー？」

先輩は大きな声でさっきの店員さんと呼んだ。

vol. 11＊先輩の過去（part3）

さっきの店員さんは、足早に私たちの所へ来て、注文をとり始めた。

「このショートを二つ。」

真琴先輩はメニューに載った写真を指さしながら言った。

「それと、ホットコーヒー二つで。」

「え、あたしコーヒー飲めない。」

私と先輩が目を見つめあっていて、そこに店員さんが不思議そうな顔をしていた。

「ぷはっ！智華ちゃんコーヒー無理なんだぁ！なんか意外かも。」

次の瞬間、先輩はぶっ、と吹き出して笑っていた。

「…コーヒーを一つやめて…オレンジジュースにしてください…」

先輩はまた吹き出した。

「ふはっ！オレンジかよ…！智華ちゃんかわいいんだけど…！」

私は恥ずかしくて熱くなってきた耳を触りながらそっぽを向いていた。

「では、ご注文は以上でよろしいですか？」

店員さんはにっこりと首を傾げた。

「はい。」

真琴先輩が答えた。

「では、ご注文の確認をさせて頂きますね。
苺のショートケーキが二つ、ホットコーヒーが一つ、オレンジジュースが一つ。」

店員さんがオレンジジュースと発した時に、
真琴先輩はちらっと私の方をみてクスッと笑った。

「では、ごゆっくりどうぞ。」

店員さんは奥の方に去ってゆき、真琴先輩の携帯の着信音が鳴った。

♪ピロリローン

私はその音に反応し、目を丸くし興奮気味で先輩に話しかけた。

「あああっ！それえっ！You and Iですかあ！？
先輩、まさかMAKIKO知ってますかあ？あたし超ファンなんです！」

興奮気味で、思わず声が大きくなっていた！

「え、智華ちゃんMAKIKO好きなの！？…実はあたしも…！」

MAKIKOとは、数年前にデビューしたばかりの女性歌手である。

20代前半で、主にファンは中高生。

シングルCDは大きな売り上げはないが、毎回オリコン8位くらいに入っていて、

私が唯一シングルCDの発売を楽しみにするアーティストだ。

「実はね…彼氏も…MAKIKOの超ファンでさあ…」

その時、先輩の話をさえぎるかのように、あの店員さんがやってきた。

「お待たせしました！苺のショートとホットコーヒーと、オレンジジュースでございます。」

早口で説明を済ますと、

「ごゆっくりどうぞ。」

店員さんはすぐに行ってしまった。

「じゃあっ…食べよっか！」

「…はい！」

私と先輩はフォークを持った。

vol. 11＊先輩の過去（part3）（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

こんな細々としたスペースまで目を通して頂き、本当に有難うございます！

実は来週学校の方でテストが入っており、今まで以上に更新が遅くなるかもしれません；；

出来る限り更新しますが、やむを得ず更新が出来なかった日はお許しください。

いつも応援してくださる読者様の方、本当に感謝でいっぱいです。では、これからよろしく願います。

vol. 12＊先輩の過去（part 4）

「MAKIKOのさあ、アルバム買った？」

先輩はおいしそうにケーキのささったフォークを運びながら私に質問した。

「もちろん！予約して買いましたッ！」

そう言うと、私はケーキの上のっていた苺を食べた。

…2人の間には不思議な空間があった。

ぽっかり穴が空いた様な空間だ。

…やばい、しらけてきた。

何か会話…。

「あ、先輩！」

「ん？」

「先輩の彼って、どんな人なんですか？」

とっさに思いついた会話だ。

先輩は飲んでいたコーヒーを吹き出した。

「へ！？何突然…」

「…いや、なんか思いついたってゆうか…」

先輩はマグカップをカウンターに静かに置いた。

「んー…そうだなあ、…いい人かな。」

先輩の頬は次第に赤くなってきた。

「浮気してるんじゃないかってヒヤヒヤするけど…あたしには、そ

のヒヤヒヤが心地良いの。」

私は先輩の話を聞きながら、隣で最後の一口を口に入れた。

先輩はコーヒースプーンでかき混ぜながら話し続けた。

「あたしね…2年になった頃、すっごい荒れててさあ…、毎日部活サボって、先輩とか、他の部員に陰口とか言われたり、靴隠されたりして…。

それは自分がいけないのに、逆ギレして、3年の不良に手を借りたんだ。

皐月先輩と、静香先輩。

そして、その中でも強かったエリナ先輩。

あの金髪で、サラサラな髪の人だよ。

わかるでしょ？」

先輩が久しぶりにこっちを向いた。

「あ、わかる…、けど、廊下ですれ違った時、怖かったな。」

「先輩たちはみんな親がいないの。
エリナ先輩のご両親は先輩のことを置いて家から出ていったんだって。

それに、お父さんは元暴走族なんだって。

2人はエリナ先輩が幼い頃に家を出て行って、それ以来親戚のおばさんに育てられたんだそうだよ。」

「…かわいそう。」

私の胸に、何かがジーンと来た。

「中学に入学したら、急にエリナ先輩が変わって…、おばさんも出て行ったらしいの。」

皐月先輩と静香先輩は、親同士が離婚して、2人ともお父さんと2人暮らししてるの。」

「そうだったんだ…。」

「けど、家族と交流する時間も全然なくて、いつの間にか、お金だけを与えたり貰ったりする関係になってたんだって。」

先輩は、悲しそうな顔でコーヒーを一口飲んだ。

「3人共、野放しだったから…あんな風になっちゃったの…。
だからあたし、あの人たちの中に入れば、陰口とか、いじめとか無くなるかなって思ってた…。」

「で、先輩はそこに…？」

先輩は、コクン、と小さく頷いた。

先輩の彼の話を聞いたはずなのに、

なんだか真剣な話になってるし、第一話題が変わっている気がする…。

だが、まあいいか。

私はオレンジジュースをストローで飲みながら、話の続きを聞いた。

vol. 12＊先輩の過去（part 4）（後書き）

更新しましたあ！

テストなんて、もうどうでもいい・・・（爆

vol. 13＊先輩の過去（part5）

――2年前の5月

「お願いします！私をあなたたちと一緒に居させてください！」

真琴はアスファルトの道路に土下座した。

エリナたち3人はそれにかまわずズカズカと歩き、
そして近くのコンビニのある方面に向かった。

「うぜーんだよ。お前みたいな後輩が一番うぜーんだよ！」

立ち止まった3人に対し、真琴は顔を上げる。

エリナは腕を組み、見るからに強そうな態度をとっている。

「なんでそこまでウチらと一緒に居たいんだ？」

皐月は一步前に出てしゃがみ、土下座する真琴の顔を覗き込んだ。

「…」

「言えねーじゃん。」

静香に続き、かつたるような表情で、エリナが言う。

「どーせ、ウチらと一緒に居れば他の奴等から怖がられるだとか、いじめがなくなるとか考えてるんだろ？」

自分の思っていたことを、そのまま突かれた真琴は、思わず冷や汗が走った。

「もーいいよ。こんな奴、放って置こ。」

3人は再び歩き始める。

「…お願いします！とにかく一緒に居たいんです！何でもしますから、お願いします！」

ピクッ

先頭を歩いていたエリナ、それに続いて静香と皐月が足を止めた。

「…何でもするって言ったな…？」

もう夢中だった真琴は、何が何だか自分でもよくわからずに頷いた。

「だったらさあ、いいんじゃないね？」

「それにさあ、コイツよく見たら結構いい奴そうじゃん。」

「ウチらの召使い…。いいんじゃないね？かなり虫のいい話なんですけ

どっ！」

3人はコソコソとこんな会話をし、一斉に真琴の方を向いた。

「いいよ。ウチらの仲間に入れてやる。」

エリナは相変わらず腕を組み、まるで自分が女王かのように言い放った。

「本当ですかっ!？」

真琴はその場に立ち上がった。

「ああ。ただし、ちょっとした契約を交わしてもらうよ。」

エリナは背負っていたスクールバッグのファスナーを開け、中身を漁り始めた。

「…あった。これに書いてよ。」

エリナが出したのは、

ピンクのラメの表紙に、ペンで色々と言葉の書かれているリングノート、

そしてボールペン。

エリナは真琴にノートとボールペンを手渡す。

エリナは真琴の前までノートを持って行くと、パラパラという音をたててページを開く。

皐月と静香は両側から覗き込んでいた。

「ほら、ここだよ。早く書いて。自分の名前とクラスとケー番。あとは適当にサインして。」

真琴はボールペンを握ったが、どうしたらいいかなんとか戸惑っていた。

「何ぼーつとしてんの？早く書きなさいよ。」

エリナはノートを叩いた。

その反動で真琴はノートを落とし、エリナの顔を伺いながらさっきのページを開いていた。

「…契約って…何を契約するんですか？」

真琴は震えた声で聞いた。

エリナたち3人は顔を見合わせる。

召使いなんて、言える訳が無い。

「その…えと…あれよねっ！静香！」

皐月は静香の肩を叩いた。

「えっ、その、なんてゆうか…、あ、そうよ！私たちと仲良くしま
しょう！って契約よ。」

ね、エリナ様。」

静香はエリナの肩を叩いた。

皐月と静香は2年で、真琴と同じ年。

エリナと手を組んだ理由は…言うまでもない、真琴と同じだった。

静香も皐月も、エリナと手を組むまでは目立った子ではなくて、クラスの中でも地味な存在で、真琴とクラスの違った2人はお互いに名前すら知らなかった。

だから、エリナの事も「様」付け。

「…ほら、早く書いてよ。」

いかにも嫌そうなエリナは、目を細めたまま真琴を睨みつける。

真琴はそこに、『2—3 森 真琴 080—XXXXX—XXXXX
X』と書き、
その横に小さく「まこと☆」とサインらしき物を書いた。

「何これ、キモ…」

真琴のサインに、エリナは冷たく言い放つ。

…が、次の瞬間だった。

「これで契約完了！明日からよろしくね！真琴！」

人が変わったかのように真琴はにこやかに笑い、真琴の右手を取り握手をした。

皐月も静香も呆れて身動きを止めている。

「じゃあ、また明日。明日の朝、アタシの教室来てねー！」

するとエリナはリングノートから1ページ切り取って真琴に渡す。

「ばいばーい！」

歩いていくエリナに、皐月と静香は小走りで追いかけた。

『3-1 浅野 エリナ 090-XXXXX-XXXXX erin
a-sanoXX@XXXXXXXXX.co.jp』

紙にはそう書いてあった。

真琴は複雑な足取りで自宅へ向かったのだった。

vol. 14＊先輩の過去（part 6）

次の日の朝、真琴は言われた通り、エリナの教室へ向かった。

2年の教室は1階にあり、3階にあった3年の教室に入ることなど、数えるほどしかなかった。

真琴が3－1の教室を覗いていると、誰かに後ろから肩を叩かれた。

「うわっ！」

真琴はおもわず声を出してしまった。

後ろを振り向くと、目の前にはエリナがいた。

「おおっ！早いじゃん？じゃ、さっそく行こうかな。」

エリナは真琴の手を取り階段を降りようとした。

真琴は階段を降りている途中、エリナの手を放した。

「どこ行くんですか？もうすぐ予鈴鳴りますよ？」

エリナはかまわず階段を降りた。

「どこでもいいじゃん。早く行くよ。」

真琴は一瞬戸惑ったが、エリナを追わなくてはと、早足で階段を降りた。

エリナは昇降口に着くと、磨き上げられているローファアを履いた。

真琴は履きかけているエリナに顔を覗く。

「あのっ…！臯月ちゃんたちは…。」

ちょっとヒヤヒヤしながら聞いた。

「ああ、現地集合するの。今から月1の集まりがあるんだよ。」

エリナは嫌そうな顔をして言った。

「月1の集まりってなんのですか？サークルかなんかですか？」

「…っ、まあそんなところ。」

ローファアを履き終えたエリナは、まだ履いていないエリナに構わず歩き出した。

先生たちの見張りに注意しながら。

門を出る手前で、エリナが立ち止まった。

「真琴！お願いだから誰にも見つからないようになー！」

エリナは大きな声で真琴に呼びかけた。

「…エリナ先輩の方が危ないってば…。」

真琴は小言を呟いた。

vol. 14＊先輩の過去（part 6）（後書き）

無事にテストが終わりましたーbb

これからは普段どおりに更新しますねー

こんな作者の小言までご覧なってくれる方、本当に感謝しまくります♪♪

これからも応援お願いします。

vol. 15＊先輩の過去（part 7）

途中、通学路を歩いていると、
体育館に繋がる通路から、バレー部の人たちが見えた。

真琴は歩きながら、ゲラゲラと笑いながら話す部の先輩たちを見ていた。

すると、運が悪いことに、部員の一人と目が合ってしまった。

真琴と目が合ったのは亜矢奈。

亜矢奈はわざと真琴に聞こえるように、

「ねえねえ！あっちであたしらのコート見てる人が居るんですけどー
！」

と他の人に言った。

すると、部の人たちの視線は真琴に集まった。

「てゆうか、朝練サボったくせに、あいつ学校までサボる気じゃね？」

「まじめで可愛い後輩と思ってたんだけどお、ウチらの事ジロジロ見ないでくださあい。

顔に何かついてますかあ？？」

部員の一人が言いながら自分の顔を指差すと、みんなはまたゲラゲラ笑い始めた。

通路を歩いていたのは、ちょうど3年の真琴の事をいじめる先輩たちで、

その中でもリーダーだった亜矢奈は周りに人がいなく、真琴をいじめる大チャンス、と思っていた。

「やっちゃんおうよ。」

亜矢奈が言うと、他の部員たちは

「いーよ♪」

「OK！」

と真琴のもとへと、近づいてきた。

真琴はその場で後ずさりしたが、部員たちは足早に真琴のもとへ集まり、後ろにさがれなくなった真琴は先輩たちに囲まれた。

先輩たちは…ニヤニヤしながら真琴を見ている。

「前からさあ、お前の事がウザくてさあ、ウチらの前から消えて欲しかったんだよね。」

そう言った部員の一人が真琴のすねを蹴る。

「…痛っ…。」

真琴は小さな声でうなった。

「はあ？何が『痛っ…』だよ！黙ってろよ！キモいんだよ！」

そう言って、また部員の一人が真琴の右頬を思いっきり叩いた。

「…っ…」

真琴が下を向いていると、冷たい涙が頬を伝った。

冷たい涙が伝っても、叩かれた右頬は腫れ上がり、真っ赤に手形がついた。

「お前らずりーよ！アタシにもやらせろ！」

亜矢奈はそう言い放ち、次に真琴を叩こうとしていた部員の手をはらった。

「消えろよ！」

亜矢奈はそう大きな声で言い、真琴を叩こうとした。

パンッ！

…鈍い音がした。

けど、なぜだろう…。

真琴の頬は痛みを感じなかった。

そして真琴は、恐る恐る上を向いた。

「…先輩…？」

亜矢奈は、真琴ではなくエリナの頬を叩いた。

エリナは、真琴がなかなか来ないから戻ってきたようだった。

「てめえ、何エリナ様のこと叩いてんだ！？死にてえのか！？」

エリナは、痛々しい頬を放っておいて、無我夢中で亜矢奈の胸ぐらを掴んだ。

「おい！なんか返事しろよ！お前コイツに何したんだよ！」

エリナは青いカラコンの入った目を大きく開いて亜矢奈を精一杯睨んだ。

「…」

エリナの迫力のあまり、亜矢奈はつい黙り込んでしまう。

「お前、あたしのダチに何やってんだよ！見てみるよこれ、真っ赤じゃん！」

エリナは真琴の頬を指さす。

真琴はエリナの迫力に、怖くて思わずその場に座り込んでしまった。

亜矢奈は下を向き、相変わらず黙ったままだ。

「おまえにも、こいつと同じ苦しみを味あわせてやるよ！」

そう言うと、エリナは亜矢奈の顔を掴み、無理やり上を向かせて思いっきり亜矢奈の頬を叩いた。

周りにいた部員たちは、怖がってガクガクと震えている。

「お前ら、覚えてろよ。エリナ様を殴った罪は、一生消えねーぞ！」

エリナはそう言い放ち、足元に置いてあったスクールバッグを背負った。

亜矢奈はその場に倒れ込んだ。

「おい真琴、早く行かねえと。」

真琴は、今までに起こった、漫画や小説の中の一部のような出来事に驚きを隠せなくて、
その場から立ち上がれなかった。

その場に居合わせた部員たちも真琴と同じで、
その場でエリナと亜矢奈のことを見比べていた。

「おまえら、人の事をジロジロ見てんじゃねえ！早く教室帰れ！」

エリナが怒鳴ると、亜矢奈を除く3年の部員たちはサッと走ってい

った。

「おまえも帰れよ！」

エリナは亜矢奈の頭を軽く蹴った。

亜矢奈はもう子供のように泣きじゃくっている。

真琴はそれを見て啞然としていた。

「お前も行くぞ！ほら、立て。」

するとエリナは真琴の手を取り、真琴のことを引っ張った。

真琴が立ち上がると、タイミングよくエリナの携帯が鳴った。

♪ピロリローン

エリナは真琴と繋いでいた手を振りほどき、スカートの右ポケットから携帯を取り出した。

「もしもしー？あれー、健じゃん？」

『おう。エリナ？おせーよ。約束の時間過ぎてんぞ？』

「ああゴメン。ちょっとトラブったからさ。」

『とにかくさあ、こっち…みんな揃ってるし、石井来て…るみたいだよ？』

なん…か早速イ…チャついてる。』

「…誰と？てゆうかそっち電波悪い？なんか声が途切れてるよ。」

『……………わ…りい、電波悪…いみた…いだか…ら！』

プツッ

電話が切れて、エリナは携帯の画面を見た。

向こうの電波が悪いようだ。

エリナは携帯をポケットにしまって、せかせかした様子で歩き始めた。

それに続いて真琴も歩き始めた。

亜矢奈は…、泣きながら教室に戻っていった。

vol. 16＊先輩の過去（part 8）

電車で揺られて10分。

真琴とエリナは、ある小さな居酒屋に向かった。

元暴走族だった健の父親が経営してるので、
平日の午前中に入ってたって注意の一つもされない。

駅の改札口を通ると、真琴の携帯に電話がかかってきた。

♪ピロリローン

電話をかけてきたのは…、自宅…。

お母さんだ！

真琴は電話に出るかでないか迷ったが、なかなか鳴り止まないので、
でる事にした。

恐る恐る、通話ボタンを押すと：

「はい。」

『真琴？はいじゃないわよ！今どこにいるの！
学校から電話がかかってきたわよ！…何か返事なさい！』

「…」

『あんたねえ、学校サボってどうするの！？
他に誰と居るの？あなた今日部活の朝練も出てないんですって！？
あなたねえ、自分のやった事がどんな事かわかってるの？まったく
…』

真琴の母は教育熱心で、
小さい頃から門限や制限が厳しく、
遊びに行く時は必ず親付きだったり、
門限までに帰ってこなかったら晩ご飯抜きだったり、
とにかく厳しい母親だった。

中学に入ってそれは減ったものの、真琴は母の厳しい愛情にストレスを感じていた。

『とにかく、今日は家に帰ってこないでくださいね！
学校を無断でサボった人の顔なんて見たくありません！』

ブチッ

…真琴はどうしたらいいかわからなかった。

今頃気付いたが、今日は学校のある日だ…。

同級生の子は今頃授業中だ。

夜は家にも帰れなくて…。

真琴は今にも泣き出しそうだった。

そんな真琴を置いて、エリナはどんどん歩いていく。

「早くついてこいよー。」

エリナは真琴にそう言い、またズカズカと歩き始めた。

真琴は、今は母の事は考えちゃダメ、と自分に言い聞かせ、エリナを追いかけて走っていった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4084b/>

契約友達

2010年10月10日06時40分発行